

藪田先生と哲学史

浅 沼 光 樹

藪田坦先生は西谷啓治門下である。宗教学を専攻した先生はエックハルトを研究の対象とされた。これはごく自然な選択であり、当時は研究室の先輩のほとんどがドイツ神秘主義を研究していたところがた覚えがある。ところが修士論文の提出後、先生は研究対象を変更する。その経緯については先生自身の回想がある。エックハルト研究に一種のゆきづまりのようなものを感じ、哲学を本格的に研究したいと考えた先生は西谷を訪問する。新しい研究対象の候補として先生が考えていたのはシェリングであった。しかしこの申し出に対して西谷はニコラウス・クザーヌスの研究をすすめた。これによって先生はクザーヌスの研究に従事するようになった。

クザーヌスはエックハルトと同様にドイツ神秘主義の系譜に属する。しかしその思索はエックハルトと比較すると、心の内面に向かうというよりも、宇宙ないし世界へと向けられ、その構造の

概念的把握に力がそがれている印象を受ける。クザーヌスの内に先生は、無限をめぐる無限な思惟、つまり二つの無限である神と宇宙の探求を同時に、いわば一つに重ね合わせて遂行しようとする、それ自身無限な思惟を見出した。

しかし同時に先生は、このような特質をもつクザーヌスの思惟を西洋の近世的思考の出発点として、その基本的形態を形づくつたものとして捉えようとした。このようにしてクザーヌスを起点として西洋近世哲学史を展望しようというのが、京大在職時代の先生の主要な関心であったように思われる。先生が見出したクザーヌスからカントへという西洋近世哲学史の道筋は独創的・啓発的であるだけでなく、私たち教え子にとっては『純粹理性批判』演習の記憶と相俟って懐かしい思い出でもある。

このように回顧してみると、エックハルトからクザーヌスへの研究対象の変更が、研究者としての先生の人生の大きな転換点を

なしていることがわかる。では哲学を本格的に研究したいという先生の願望はどのようにして醸成されたのであろうか。その思いが先生自身の内面から発したものであるの言うまでもない。だがその場合にも西谷が一種の触媒の役割をつとめたのではなかったかと私は推測する。このように言うのは、この間、西谷が西洋近世哲学史の教授として講座を担当することになった、という事情を踏まえてのことである。

このような外的な身分の変化は決して宗教哲学者を哲学史家にするものではない。しかし本来哲学史家としての資質を持ち合わせていた人物がそれに相応しい環境を得て本領を発揮するということはあるだろう。下村寅太郎が回想しているように、西谷が宗教学講座を担当するのは最初意外の念をもって受けとめられたのである。西谷はこのとき哲学史家としての面目をあらわし、その師を仰ぎ見るまなざしと自分自身の内面をさぐる視線とが先生の中で一つに撚り合わされて、〈ゆきづまり〉の感覚をともなった〈本格的な哲学研究への渴望〉が胚胎することになったのではないだろうか。

このような仮説が成立するとしたなら、西谷門下に占める先生の特別な位置が浮び上がってくる。西谷の思索の重要な一部分でありながら、宗教学講座を担当したのために表立って展開されることのなかった側面を引きつぎ、それをさらに掘り下げていったという点に、他の弟子とは異なる先生の独自性はあったのではな

いか。しかしこのことを逆に言えば、宗教学から西洋近世哲学史へと研究の重心を移動させながらも、このような歩みにおいて先生は一貫して師である西谷を模範とし、西谷の宗教哲学的・哲学的思索を対話相手としながら自身の研究を進めていた、ということになる。

このような西谷との、おそらくは唯一無比の師弟関係を先生は一体いつごろから自覚するようになったのであろうか。先生のいない今、もはや誰もそれを正確に知ることはできない。しかし少なくとも京大在職時代には、既にそのような自覚のもとに研究活動を行っていたというのは間違いないであろう。

先生の退官記念講演は「近世哲学における神の問題」と題されていた。長い間、私はチュービンゲン大学において先生が師事したヴァルター・シュルツの著作『近世形而上学の神』が念頭に置かれているのだと思っていた。しかしこの題目の選定にはそれ以上の意味が込められていたようである。「近世哲学における神の問題」とは西洋近世哲学史講座の教授としての西谷の最後の講義題目であった。この事実には先生の意志のようなものを感じる。先生が自覚的に西谷の思索の、他には十分に継承されなかった部分を大切な財産として受けとめ、先生なりの仕方でも継承・発展させようとしていたのではないかと考えるのである。

(西洋哲学史 平成四年卒 西洋哲学史専修非常勤講師)